

名前 () 日づけ (/) できた数 (/28)

使い方 本文を声に出して読んでから、傍線の番号を手がかりに解きます。この場面の山は「御幸」が誰のお出ましかの見分け、敬語（御覧す・思し召す・さぶらふ・わたらせ給ふ）の「誰から誰へ」、そして荒れた庵室を描く対句です。

あらすじ＝壇ノ浦で平家が滅び、わが子安徳天皇も一門も失った建礼門院は、出家して大原の寂光院でひっそりと暮らしていた。文治二年の春、後白河法皇はその住まいをご覧になりたいと思うが、寒さが残るうちは控え、夏になって北祭も過ぎたころ、夜明け前にお忍びで大原へ御幸する。庵のあたりは夏草が茂り、屋根も扉も破れて、霧が香、月の光が灯明のようである。法皇が声をかけると年老いた尼が現れ、女院は山へ花を摘みに行っていると答える。やがて山から濃い墨染めの衣の尼が二人、岩道を下りかねながら現れる。花籠を肘にかけ岩つつじを持つその人こそ女院であった。女院は、こんな姿を法皇にお見せすることになるのかと、深く恥じ入る。

一次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

【冒頭（御幸の決意）】

かかりしほどに、文治二年の春のころ、法皇、建礼門院大原の閑居の御住まい、^①御覧ぜまほしう思し召されけれども、如月・弥生のほどは、風はげしく、^②余寒もいまだつきず。…北祭も過ぎしかば、法皇^③夜をこめて大原の奥へ^④ぞ御幸なる。

【寂光院・庵室の描写】

庭の夏草しげりあひ、青柳の糸みだれつつ、池の浮草波にただよひて、^⑤錦をさらすかとあやまたる。…^⑥薨やぶれては霧不断の香をたき、^⑦柩おちては月常住の灯をかかく。

【老尼（阿波内侍）との対面】

法皇「人やある、人やある」と召されけれども、^⑧御いらへ申す者もなし。ややあつて、老い衰へたる尼一人まゐりたり。法皇「これに女院は^⑨いづくへ御幸なりぬるぞ」と仰せければ、「この上の山へ、^⑩花つみにいらせ給ひてさぶらふ」とぞ申しける。

【女院、山を下る】

上の山より、^⑪こき墨染めの衣着たる尼二人、岩のかけぢをつたひつつ、^⑫おりわづらひ給ひけり。…^⑬「花がたみ時にかけ、岩つつじとりぐしてもたせ給ひたるは、女院にて^⑭わたらせ給ひさぶらふなり」とぞ申しける。女院、「かかる御ありさまを^⑮見えまゐらせむずらん恥づかしさよ」とて。

語注 かかりしほどに＝こうしているうちに。文治二年＝一一八六年。壇ノ浦の戦い（一一八五年）の翌年。法皇＝出家した上皇。ここは後白河法皇。建礼門院＝平清盛の娘徳子。高倉天皇の中宮で、安徳天皇の母。閑居＝世間を離れて静かに暮らすこと。また、その住まい。御覧す＝「見る」の尊敬語。ご覧になる。思し召す＝「思ふ」の尊敬語。お思ひになる。まほし＝「たい（願望）。如月・弥生＝旧暦二月・三月。余寒＝春になっても残っている寒さ。北祭＝賀茂神社の祭（賀茂祭・葵祭）。旧暦四月に行われた。夜をこむ＝まだ夜が明けきらないうちに事を行う。御幸＝上皇・法皇・女院などのお出かけ。天皇の場合は「行幸」という。あやまたる＝（くか）と見まがえらる。いらる。薨＝屋根の瓦。不断＝絶え間ないこと。柩＝戸を開け閉めする軸。転じて、扉・戸。常住＝いつも変わらないこと。かかく＝（灯を）とます。かかげる。へ＝返事。ややあつて＝しほらくして。これに＝ここに。この場所に。墨染めの衣＝墨で染めた黒っぽい衣。僧や尼が着る、出家した人の衣。かけぢ＝がけづたいの険しい道。わづらふ＝（動詞の下について）くしかねる。くするのに難儀する。花がたみ＝花を入れるかご。花籠。とりぐす＝取り添える。いっしょに持つ。わたる＝「行く」の助動詞。くし申し上げる。むずらん＝くだらう。ここは下の「恥づかしさ」にかかる。見えまゐらせむずらん＝（法皇に）お見せ申し上げることになるのだらう。※寂光院の補＝京都・大原にある尼寺。建礼門院が隠棲した所。※阿波内侍＝少納言入道信西の娘。ここに現れる老尼で、女院に仕えていた。※⑥・⑦の二句＝もとの『平家物語』では、この二句は漢詩文から引いた句としてかぎかつこでくくられ、「かやうの所をや申すべき（＝こつという所のことを言うのだから）」と受けている。もとの記事の本文はそれの受けの部分省いている。※本文中の「…」は、もとの文章の一部を省いたところ。

A 語句の意味と読み (1～6)

- (1) ③ 「夜をこめて」の意味を書け。
- (2) ④ 「ぞ御幸なる」の「御幸」の読みと意味を書け。
- (3) ⑤ 「錦をさらすかとあやまたる」の「あやまたる」の意味を書け。
- (4) ⑪ 「こき墨染めの衣」の「墨染めの衣」とはどのような衣か、書け。
- (5) ⑫ 「おりわづらひ給ひけり」の「わづらふ」の意味を書け。
- (6) ⑬ 「花がたみ肘にかけ」の「花がたみ」の読みと意味を書け。

B 文法 (7～12)

- (7) ① 「御覧ぜまほしう思し召され」の「まほし」の文法的意味を書け。また「まほしう」がどのような形かも書け。
- (8) ② 「余寒もいまだつきず」の「いまだくず」は、どのような意味を表す言い方か書け。
- (9) ④ 「ぞ御幸なる」の「ぞ」の働きを答え、結びの語とその活用形も書け。
- (10) ⑨ 「いづくへ御幸なりぬるぞ」の「ぬる」は何の助動詞の何形か。またそうなる理由も書け。
- (11) ⑫ 「おりわづらひ給ひけり」の「けり」の文法的意味と活用形を書け。
- (12) ⑮ 「見えまゐらせむずらん」の「むずらん(むずらむ)」を文法的に説明せよ。

C 主語・指す内容・敬意の方向 (13～17)

(13) ① 「御覧ぜまほしう思し召され」の「御覧ず」「思し召す」は、それぞれの動詞の敬語か。また、誰から誰への敬意か。

(14) ⑧ 「御いらへ申す者もなし」の「申す」の敬語の種類と、誰への敬意かを書け。

(15) ⑨ 「いづくへ御幸なりぬるぞ」の「御幸」は誰の動作か。また、この言葉を言ったのは誰か。そう判断できる敬語の手がかりもあわせて書け。

(16) ⑩ 「花つみにいらせ給ひてさぶらふ」の「さぶらふ」の敬語の種類と、誰から誰への敬意かを書け。

(17) ⑭ 「わたらせ給ひさぶらふなり」の「わたらせ給ひ」は誰への敬意か。また、このような敬語の形を何というか。

D 口語訳 (18～21)

(18) ①をふくむ「建礼門院大原の閑居の御住まひ、御覧ぜまほしう思し召されけれども」を口語訳せよ。

(19) ⑥・⑦「薨やぶれては霧不断の香をたき、柩おちては月常住の灯をかかぐ」を口語訳せよ。

(20) ⑨をふくむ「これに女院はいづくへ御幸なりぬるぞ」を口語訳せよ。

(21) ⑭をふくむ「女院にてわたらせ給ひさぶらふなり」を口語訳せよ。

E 内容・記述 (22～25)

(22) ②「余寒もいまだつきず」とあるが、法皇の大原への御幸が春先ではなく夏になってからになったのはなぜか。本文に即して書け。

(23) ⑥・⑦の二つの句に用いられている表現技法を答え、荒れはてた庵室をどのように描いているか説明せよ。

(24) ⑬「花がたみ肘にかけ」・⑭「わたらせ給ひさぶらふなり」とあるが、ここに描かれた女院の姿は、女院のどのような境遇を表しているか書け。

(25) ⑮「見えまゐらせむずらん」に続けて、女院は「恥づかしさよ」と言っている。ここに表れている女院の心情を書け。

F 文学史 (本文全体をふまえて答える) (26～28)

(26) この文章の出典『平家物語』はどのような種類の作品か。また、この場面が収められている巻の名を書け。

(27) ④「ぞ御幸なる」の御幸をしたのは後白河法皇である。では、法皇が訪ねた「女院」とは誰か。その人物について簡単に書け。

(28) ⑥・⑦に描かれた荒れはてた庵室にも通じる、『平家物語』全体をつらぬく仏教的なものの見方を表す四字の言葉を二つあげ、その意味を書け。

【テスト直前チェック】この三つ ①「御幸」は④が法皇、⑨が女院。同じ語でも誰のお出ましかが変わる。読みは「ごかう（ごこう）」、天皇なら「行幸」と読み分ける。②敬語は「誰から誰へ」をセットで。地の文の①「御覧ず・思し召す」は作者から法皇へ、会話文の⑩「さぶらふ」は老尼から法皇へ、⑭「わたらせ給ふ」は老尼から女院へ。③⑥⑦は対句。荒れはてた庵を、香と灯明のともる仏の道場に見立てている。「荒れている」だけで終わると減点されやすい。